

第47回北海道学生選手権は10日、新型コロナウイルス対策のため原則無観客で開幕した。国の緊急事態宣言などの影響でシーズンインが遅れ、リーグ戦を断念して、1、2部とも初のトーナメントで全道王者を決めることになった今季。第1節は1、2部の1回戦各1試合を行った。

全日本大学選手権・甲子園ボウルへつながる1部は、帯広畜産大（前年Bブロック2位）が釧路公立大（前年2部優勝）を35-18で下し、準決勝進出を決めた。1回戦のもう1試合は室蘭工業大（前年Bブロック3位）の棄権で、北星学園大（前年Bブロック2位）が準決勝進出を決めている。

帯広畜産大は先制を許した直後の第1Q7分、QB貫井哲平（4年、千葉・船橋東高）がWR松田愉慎（3年、帯広三条高）へ68ヤードのTDパスを決め、PATも加えて7-6と逆転。2分後にはWR山村達也（4年、江別・大麻高）がリバーズプレーで、エンドゾーンまで37ヤードを走り切ってリードを広げた。山村は第3Qにもリバーズで6ヤードのランTD、8ヤードのTDキャッチを決めた。出足の鈍かった守備も、主将のDE玉川雄太（4年、広島・尾道北高）の好タックルで勢いづく、第3Q以降は釧路公立大の攻撃を圧倒し、1部先輩校の貫禄を見せた。

創部34年目で初めて1部の舞台に挑む釧路公立大は、キックオフ直後の自陣28ヤードからの攻撃シリーズで、RB牧野幹太（2年、札幌藻岩高）、RB内海太陽（2年、江差高）が好走。最後はQB柴田雅大（4年、滋賀・虎姫高）からオプションピッチを受けた内海が32ヤードを駆け抜け、先制のTDを奪った。第2QにはWR高坂駿佑（1年、滝川西高）の26ヤードラン、第4Qには牧野が15ヤードランでTDを決めたが、帯広畜産大の猛攻を防ぎきれなかった。

帯広畜産大の山川は「先制を許したが、玉川の守備に助けられた。いい試合ではなかった。TDはすべて狙っていた」と、勝利にも不満そう。「準決勝の北大戦は自分たちのやりたいことを、しっかりとやりたい」と気を引き締めた。釧路公立大のWR泉川溪太主将（4年、岩手・不来方高）は「1部で勝つために準備してきたが、実力が足りなかった」と残念がり「（順位戦の）室蘭工業大戦で自分たちのフットボールを爆発させたい」と決意していた。



ともに昨年の大会を棄権し、2年ぶりの実戦となった2部1回戦の東京農業大ー北海道医療大は、攻撃力に勝る東京農業大が26ー0と快勝し、北海道科学大との決勝にコマを進めた。

東京農業大は第2Q3分、QB金井康晴（2年、神奈川・舞岡高）の22ヤードランで先制すると、2分後にはWR杉山日向（4年、神奈川・大船高）が45ヤードのTDキャッチ、同10分にも杉山が46ヤードのTDレシーブでリードを広げた。第4QにはRB神田健心（1年、旭川農業高）がダメ押しのTDランを決めた。RBとDEで先発し、攻守で活躍した5年生の比嘉匠（沖縄水産高）は、大会棄権でプレーできなかった去年の4年生たち5人の背番号を腕に書き込んでプレーした。「2年ぶりの試合で緊張したが勝てて良かった。この1年が無駄じゃなかったと後輩に伝えるため、優勝と1部復帰を目指したい」と力を込めた。

